



津田永忠と岡山の後楽園

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

岡 山藩の二代目藩主池田綱政つなまさの時代は、新田開発など土木事業が活発に行われた。この後楽園もその一つだが、それらを手掛けたのが、津田永忠ということになる。

ちなみに池田綱政だが、各大名家の内情を記した『土芥寇讎記どけいこうしんき』の人物評によると、「生まれつき馬鹿」などと身もふたもない。父の光政ですら、そのように見ていた節もある。しかし、前号でも述べたが、光政の隠居とともに政治の一線から退かされた永忠を、再び表舞台へと呼び戻し、活躍させたのは綱政だった。馬鹿かどうかはともかく、人を見る目と、使いこなす術は心得ていたということか。

さて、岡山の後楽園だが、水戸の偕楽園、金沢の兼六園と並び、日本三名園に数えられている。この庭園は綱政の発案によるもので、貞享四じょうきょう（二六八七）年に着工した。

当時の永忠は、かつてない規模の新田である「沖新田」開発事業に取り掛かうとしていたが、綱政によって計画を延期させられ、後楽園の造園に当てることとなった。沖新田の開発については、次号以降に取り上げるが、新田開発のような実収入につながる事業よりも、風雅の道を優先させるところが、綱政が馬鹿者呼ばわりされた所以なのだろう。

さて、後楽園は旭川をはさみ岡山城の対岸に造られることとなったが、当初から一度に今日の規模になったわけではない。第一期工事は元禄二（二六八九）年に終わり、今日の五〇%ほどが造られた。この頃、園内の建物は現在の延養亭えんようていと思しき草葺きの一棟くらいしかなく、全容はおおむね牧歌的な田園風景を再現したものとなった。当時の後楽園の景観を綱政が自ら筆で記しており、草葺きの建物から、田畑を耕作する農民の姿を見て楽しみ、帰ることも忘れたという。

続いて翌年に第二期工事が開始され、面積は今日の六〇%ほどとなり、現在も庭園内に残る「御茶屋」と呼ばれる建築群が建てられた。この工事は元禄十三（一七〇〇）年に完成し、今日の後楽園の原型が築かれた。

後楽園は、綱政が城内では会うことのできない人々との非公式の会合など、様々な用途に使われる場となった。例えば、能舞台を催し、多くの領民を招待したり、身辺警護の忍びともここで会ったりしている。ちなみに綱政は子供を七〇人ももうけたというが、研究者の柴田一氏しばいちは、そうした女性たちと接したのも、この後楽園だったろうと述べている。

後楽園の御茶屋落成の祝賀宴が済んで間もなく、

永忠は五百石の加増を受け、さらに藩の番頭待遇に取り立てられた。これは後楽園造園が綱政に評価されたためと考えられる。ただし、永忠は技術官僚ではない。彼が果たした役割は、技術者を率いて普請管理を行ったこと。そして、彼が管理する社倉米をその財源に充てたことであり、次号以降に述べる永忠が行った数々の土木建築事業は、基本的にこのようなスタンスによって成された。



岡山後楽園の風景
画面左に延養亭が見える

[交通] JR岡山駅より徒歩約25分